彼女が制服を脱いだら

清楚な学級委員と快活巨乳同級生と女教師

大泉りか
挿絵／羽津樹

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　九月　夏の終わりの童貞喪失　女教師と美術準備室で……4

第二章　十月　夜の公園で同級生と初体験　巨乳少女と青姦……73

第三章　十一月　校庭の裏庭で秘密の立ちバック　同級生の口淫……126

第四章　十二月　イブは忍び込んだ教室で　優等生の破瓜……172

第五章　大晦日　美術室で恋人と年越し騎乗位　秀才の潮吹きアクメ……230

登場人物 *Characters*

山川 寿治
(やまかわ としはる)

高校二年の二学期に親の都合で転校することになった少年。美術部所属。

景井 まみ
(かげい まみ)

寿治の転入したクラスでクラス委員を務める少女。つぶらな瞳にあどけなさを残した可愛らしい容姿ながら、胸は大きい。面倒見のよい性格で、クラスでの信頼も厚い。

神谷 亜季
(かみや あき)

明るく快活な寿治のクラスメイト。寿治に一目惚れし、転校初日から気さくに接してくる。栗色のポニーテールとセーラー服を押し上げるほどの巨乳が目を引く少女。

吉永 絵里子
(よしなが えりこ)

寿治のクラスの担任であり、美術部の顧問も担当する美人教師。白いシャツに無理やり詰め込んだような豊乳の持ち主。

第三章　十一月　校庭の裏庭で秘密の立ちバック　同級生の口淫

「トシくーん、はい、これ、今日のお弁当っ」

昼休みを迎え、束の間の自由を楽しむ生徒たちの喧騒に溢れた教室に、ひときわ弾んだ声が響いた。

昼食をとるために、机を移動してくっつけたり、連れ立って購買へと向かおうとしていた生徒たちの何人かが動きを止め、声の主である亜季に注目し、そして、その視線をゆっくりと寿治へと移す。

「ひゅーっ、相変わらず、熱っついねぇ、おふたりさんっ！」

「あちーっ。ヤケドしちゃいそうっ！」

冷やかしのブーイングがすかさず飛んできた。恥ずかしさに顔がかぁっと熱くなってしまう。

「亜季ちゃん、あの……お弁当は有り難いんだけど、あんまり大きい声で、そういうことを言われると……」

「なんでぇ？　亜季のお弁当、嬉しくない？」

「いや、嬉しいは嬉しいんだけど……」
ほぼ毎日繰り返される亜季と寿治のやり取りを、クラスメイトたちは遠まきにニヤニヤと観察している。
夜の公園で結ばれたあの日以来、亜季と恋人として付き合うことになった。
まみへの密かな思いがあったから、エッチが終わった後に「付き合ってくれるよね」と亜季に言われた時、躊躇する気持ちがないこともなかったが、しかし、少女の純情を思うと、断るわけにもいかずに承諾したのだった。
もちろん、いざ付き合うと、楽しいこともいっぱいあった。
毎日弁当を作ってくれるのはありがたいし、日曜日はデートとして、東京のいろんなところを案内してくれるのも助かっている。エッチも、寿治が求めればたいがい許してくれるし、健気で可愛らしくもったいないくらいの彼女だ。けれど――。
(毎度毎度のコレばかりはなんとかならないかな……恥ずかしくて仕方がないんだけど……)
周りの視線を気にして身体を小さくしている寿治の傍に、亜季は軽やかな足取りで駆け寄ってくると、ピンク色のバンダナに包まれた弁当箱を差し出した。
「今日のおかずはねぇ、トシくんの大好きなオムライスだよ。あとえびフライも作っ

ちゃった。ねっ、せっかくだから、中庭で食べない？　天気いいし！」
「うっ、うん、そうしようか」
集中する皆の視線に居たたまれなさを感じて席を立つ。
気になってまみのほうをちらりと窺うと、まみは寿治たちのことなど、まるで気に掛けてもいない様子でクラスメイトと笑いあっていた。
あれからもうひと月が経つが、あれ以来、まみとはロクに口を聞けていない――。
（やっぱり……怒ってるのかな……）
まみの部屋で拒まれたその翌日、マンションのエントランスで待ち伏せをして、謝った。
その時は、多少気まずくはあったものの、決して仲直りできないというほどに冷たい雰囲気だったわけではなく「……また、お母さんがいつでもご飯、食べに来てって」とも言ってくれたから、そのまま時間が経てば元のように仲直りできるのではないかとの期待も少しあった。
まみの態度が硬くなったのは、亜季と寿治が付き合っているということがクラス中に知れ渡った辺りからだ。
（考えてみれば、当たり前だよな……）

まみにあんなことをしたというのに、拒まれたら、すぐに別の少女に気を移した形になってしまったのだから、自業自得だ。
（せめて友達に戻れたらいいんだけど……）
亜季という彼女がいながら、厚かましい考えかもしれないが、今の状態では寂しく思ってしまう。
「ちょっとぉ、トシくんったらぁ、なんでため息とかついてるの？　さっ、行こうっ」
別の少女のことを考えて、はぁとため息を漏らしている寿治の腕に亜季が腕を絡めてぶらさがるようにしがみつく。
「ちょっ、亜季ちゃん、学校でそういうのはダメだってば」
「なんで？　いいじゃん。だって、わたしたちが、彼氏と彼女だってこと、みんな知ってるんだし」
慌てて振り払おうとするも、亜季はまるで見せびらかすかのように、さらに身体を寄せた。
「わぁっ、熱いなー。お前ら、いちゃつきすぎ！」
「あ、亜季ちゃん、わかったよ、外行こう、外！」
さっきまで冷やかしていたクラスメイトたちもさすがに呆れた様子だ。居たたまれ

なさに亜季と腕を絡めたまま、慌てて教室から退散する。
（はぁ……参ったな）
教室のドアを出る瞬間、まみはどう思ったかが気にかかり、亜季にバレないようにまみを盗み見る。
（あ……れ……!?）
ほんの一瞬だけ、まみと目が合った気がした。

「亜季ちゃん、あのさ、クラスの中でさ、イチャつくのは、やめてくれないかな」
亜季を人影のない裏林へと連れていったのは、ちゃんと話をしたかったからだ。
亜季の処女を貰った行きがかりで、付き合うことになったとはいうものの、亜季のことは好きだし、それなりに大切にしているつもりだ。
だから、亜季が行きたいところがあれば、時間とお金の許す限り付き合いたいと思っているし、見たいという映画があったら、興味がなくても付き合うようにしている。
ただひとつ、亜季のテンションの高さというか、周りを顧みないイチャつきだけは無理だ。冷たい、寂しいというのならば、せめて学校内ではやめて欲しいというのが正直なところ。

けれど、今までも再三、やめてくれと頼んでいるにもかかわらず、亜季の態度はまるで改善される様子はない。そこで、今度こそ、じっくりと説得しようと、ひと気のない裏林へと連れてきたのだった。

「なんで、学校でイチャつきたくないの？」

「だって、恥ずかしいし……」

「ふーん……本当にそれだけ？」

「それに、人がイチャついてる姿とか、見たくない人だっているだろうし」

「例えば？」

「え……失恋したばっかりの人とか……恋人がいても、上手くいってない人とか……あとは学校は恋愛しに来る場所じゃないって考えてる人だっているだろうし……」

ぶっきらぼうな口調で突っかかってくる亜季にたじろぎながらも、なんとか説得を繰り返していると、亜季はふと思いつめた表情を浮かべて寿治を見上げて言った。

「トシくん、本当はさ、見られたくないだけじゃないの？　特定の誰かに」

「えっ!?　……それ、どういう意味？」

「そのままだよ。ねぇ、亜季とイチャイチャしてるところ、見られたくない人がクラスの中にいるんじゃないの？」

本心を推し量るように、亜季は寿治の目の中をじっと覗き込んだ。真剣なその面持ちに心の中を見透かされたようで、胸がざわりと騒ぐ。
「そんな人、いないよ」
「だったら証拠、見せて」
「えっ、証拠って……」
言い終わらないうちに亜季は一歩前に踏み出すと、背伸びして寿治に抱きついた。ローファーに踏まれた落ち葉がかさりと足元で鳴る。
「ねぇ……キスして」
「えっ、だって、ここじゃまずいよ」
いくらひと気のない裏林といっても、誰かが来ないとは限らない。もしも、目撃され、学校の敷地内でキスなどしているところを教師にでもバレようものなら、大目玉を食らうどころか、停学の可能性だってある。
「大丈夫だよ、ほら、こうすれば、向こうからは見えないから」
身体をぐっと押されて、大きな樹に寄りかかる形になった。確かにこの体勢ならば、校舎のほうから人が来ても、木が死角となって守ってくれるに違いない。
（亜季ちゃん、強引なんだから……）

寿治がキスをするまで、亜季は断固身体を離す様子はない。いっそ、キスしてしまったほうが、早くことが済む。
（はぁ……仕方ないか……）
腹を決めると、亜季の頬に両手を当てて顔を上向かせた。
長い睫がかすかに上下した後、亜季の目が切なさげにきゅっと細められる。目が閉じきる前に、ちゅっと一瞬だけくちづけた。
「……そんなんじゃ、ダメだよっ」
唇が離れると、亜季は不満げに唇を尖らせた。
「えっ、だって、キスしろって……」
「亜季がしたいのは、もっとちゃんとしたキスだもん」
亜季は寿治の首に手を伸ばすと、爪先立ちに背伸びして寿治にキスをした。すぐに舌が入り込んできて、口の中をぬるぬると這い回る。
（亜季ちゃん、すごく積極的だ……）
学校でするにはあまりに濃厚なキスだった。れろんと激しく舌を絡みつけてきたり、歯茎をトントンと軽くノックしてきたりと、寿治の性感をくすぐるような情熱的なキスに、下半身が血が集まって熱くなってきてしまう。

（うわっ、どうしよう、学校なのに……）
なんとか身体を平静に戻そうとしても、少女とこんなにみっちりと密着していては、鎮まるものも鎮まらない。セーラーブラウスの上に羽織ったベージュのカーディガン越しに、少女の巨乳がムニムニと押し付けられ、性感はますます猛りゆくばかりだ。
「あれぇ……トシくん、もしかして……興奮してる？」
寿治の下半身の変化に気がついた亜季が、指先を寿治の股間に伸ばして、そっと触れた。びくん。少女の柔らかな指の感触に身体が震えてしまった。
「あっ……これはその……だ、ダメだよ、触ったらますます勃っちゃうから」
「大丈夫、それだったら、亜季がイかせてあげるよ。ね、イクのって気持ちいいんでしょ？」
亜季はその場にすっとしゃがみこむと、寿治のスラックスのベルトに手をかけた。
「そりゃあ、イクのは気持ちいいけど……でも……」
「しっ、大きな声出しちゃ、ダメ。誰か来ちゃう」
亜季はすっと立てた人差し指を唇に当てて、寿治に黙るように言うと、スラックスのチャックを開いてトランクスの上からそっとペニスに触れた。
「あっ……ダ、ダメだよ、亜季ちゃん、ここ、学校なんだから」

「学校なのに、おちんちんを勃てちゃったのはトシくんだよ？」
「それは生理現象だから……あぁっ」
亜季がトランクスの中からにゅるりとペニスを引き出した。少女との濃厚な接吻で、すっかり勃ちきった屹立は、しっかりとその赤黒い鎌首をもたげていた。肉竿には蔓が巻きついたように太い血管が浮き出し、その生々しさが、明るい日差しの下で曝け出された恥ずかしさに頭がクラクラする。
「こうやって、トシくんのおちんちんをじっくり見るのって初めてだよね」
最初の公園で交わって以降、亜季とのセックスは、父親の留守中にいつも寿治の部屋でしていた。
一度だけ、亜季の身体をじっくりと見てみたいという好奇心から、電気をつけたままエッチをしていいかと頼んでみたが、亜季は「恥ずかしいから、今はまだ無理。もっと慣れてからね」と許してくれなかったのだ。
「ずるいよ、亜季ちゃん、ぼくばっかりこんな明るいところで見られて、恥ずかしい……」
「やっぱり男のコも、明るいところで見られるのは、恥ずかしいんだ」
「そりゃあ、そうだよ……」

亜季は情けない声をあげる寿治の陰茎に手を伸ばすと、親指と人差し指とで根元を支え、お腹側に反らすようにしてまじまじと見つめた。
「こんなに立派なんだもん、何にも恥ずかしいことないよ」
初めて明るいところで目にする男性器に好奇心を隠せない様子で、興味深げにいろんな角度からジロジロと観察しては、「へぇ」とか「うわぁ」とか声を漏らしている。
(ううっ、恥ずかしいけど……なんだかちょっと興奮しちゃうかも……)
羞恥心が煽られて腰の奥がむず痒く疼く。下腹部に溜まった何かがぐつぐつと沸き立っているようで、こそばゆいもどかしさに焦れてしまう。
「亜季ちゃん、あの、もうちょっと……上のほうを触って欲しいかも」
「ん？　上ってこっち？」
亜季が根元を掴んでいた指先をすっと亀頭の段辺りまで擦りずらした。
輪にした指が陰茎に擦れ、ぞわぞわとした快感が下半身に奔り、先端にぷくりとカウパー液が浮き出ている。
「あぁっ……」
「うわぁ、なんか先っぽから出てきたよ。ねぇ、なぁに、これ？」
亜季が空いている左手を鈴口に伸ばすと、こぷりと浮き立った先走りに人差し指の

先を当てた。掬い上げて離すと、粘り気を持った透明の糸がつーっと引く。
「これは……カウパーっていって、気持ちがいいと出てきちゃうんだ」
「へぇっ、そうなんだ……すごい、まだまだいっぱい出てくるね……ぬるぬるしてて、なんだか不思議」
だらだらとペニスの先端から溢れるカウパー液に亜季は目を丸くしながらも、人差し指で掬い上げては、鈴口にとろりと塗しつける。粘り気を持ったカウパーが潤滑油の役割を果たし、ジンジンとした痺れが精道に奔って腰奥がムズムズしてしまう。
「お願い……亜季ちゃん、もう片方の手も……もっと動かしてくれるかな」
「もう片方の手？　えっと……こんな感じ？」
亜季が輪にした右手をシコシコと動かすと、痺れるような快感が陰茎を襲った。
「うん……そのまま……擦ってて」
「すごい、おちんちん、さっきよりも熱くなってきちゃったぁ。男のコの身体って……面白いね」
「面白がっちゃ……嫌だよ……あうっ」
少女の手淫は、熟練しているとは決して言えないが、しかし優しく心が籠もっていて、寿治の性感を高めるには、十分すぎる刺激だった。

しかも白昼の野外、校内で制服姿の少女にされているという禁忌感も手伝い、ゾクゾクと背徳的な興奮が加速していく。
「すごい、おちんちん、まだまだ硬くなるよ」
「あぁうっ……あぁあっ……」
少女もまた、自らの手で気持ちよくなる恋人の姿に悦びを覚えているようだった。
初めてリードする歓びを楽しむように、寿治の反応を見ながら、手の輪の締め付けを弱めたり、反対に強めに握ったりとバリエーションを試しながら手コキしてくる。
「あぁっ、亜季ちゃん……気持ちがいい……」
亀頭を過ぎる一瞬だけ手首のスナップをきかせて擦られると、まるで女の子のような声が出てしまった。
「トシくん、気持ちよさそうだぁ……」
少女は目を優しげに目を細めながら手をリズミカルに上下させる。
きゅっ、きゅっ、きゅっ——少女の柔らかな指が屹立を往復する度に、どくどくと血が流れ込む。
やがてペニスは臍につきそうになるほどに屹立しきってしまった。先端からはこぷりこぷりとカウパーが湧き上がり、亀頭はぐっしょりずぶ濡れだ。

「はぁ、亜季ちゃん。ぼく、イキたい……」
「ん、イってもいいんだよ」
懇願する寿治に同級生は優しく微笑み返すと、すっと唇を寿治の下半身に近づけた。つやつやとした唇を半開きにすると、先端からゆっくりと口内へとめり込ませていく。
（え……え……？）
一瞬何が行われたのかわからなかった。が、陰茎に蕩けそうな快感が奔った。
とろりとした唾液が滾った陰茎に絡みつき、温かな口粘膜が男竿の表皮を蕩けそうな快感で包み込む。
（うわぁっ……あぁっ……あっ）
亜季に口でされたのは初めてだった。本当はしてもらいたいとずっと思っていたけれど、言い出すのが恥ずかしくて言えなかったのだ。
（すごい……亜季ちゃんがぼくのおちんちんを……しゃぶってくれてる）
ぐじゅぐじゅに濡れた少女の口の中は柔らかだった。亀頭をずっぽりと包む頬内粘膜のつるんとした感触が漏れてしまいそうに気持ちがいい。
「こうしたら……もっと気持ちよくなれるよね」
少女は垂れ落ちる涎をじゅぶじゅぶと吸い上げながら、根元から先端へと唇を動か

した。かすかにざらついた舌先が、裏筋を這い上がるぞくぞくした快感に、二の腕に鳥肌が立つ。
「あっ……あぁっ……」
吐息を漏らすと、クラスメイトはその可愛らしい唇でぱくりとペニスを咥え込んだまま、上目遣いで、これでいいの？　というふうに見上げた。
「ううっ、亜季ちゃんの口の中……すごい気持ちいい……」
恋人が快感に浸る様子を見て、亜季の目がふっと優しげに細められた。
「嬉しい。トシくん、すごく気持ちがよさそう」
亜季はペニスを唇から抜いて根元に右手を支えると、今度は桃色の舌べろをちろりと突き出して、すっと、少年の裏筋に添わせた。ジグザグと蛇行するように先端に向かって奔らせて亀頭まで行き着くと、またもずっぽりとくわえ込み、今度は喉の奥まで飲み込んでいく。
「あぁっ……亜季ちゃん、こんなの……どこで覚えたの？」
「ん？　今だよ、トシくんが気持ちよさそうにいろいろ試してるの」
きゅっと強めに窄められた唇が、亀頭のクビレめを通った瞬間にピリリと激しい快感が奔った。全身の血が沸騰するような性感に耐えていると、今度は奥までずっぽり

とくわえ込まれ、口内粘膜のねっとりとした柔らかさが陰茎全体に悦びを生む。
「う……あぁ……ううっ」
もう喘ぎ声を我慢することもできなかった。苦労して口をつぐもうとしても、荒い息がこぼれてしまう。
（すごい、こんなのすごいよ……）
少女の唇から涎がこぼれて細い顎に流れ落ちた。じゅぽっ、じゅぶっ、じゅるっ。唾液をすする音に混じって、喉奥からはっはっという息が漏れる。
もはや限界に近かった。このままでは少女の口の中で爆ぜてしまう――。
それはさすがにいけないと思っても、射精の魅惑には勝てなかった。両手を伸ばすと、少女の頭をぐっと掴む。その次の瞬間。
どくっ！　精液が精道をかけあがり、熱い衝撃となって同級生の口の中に吐き出された。眩暈がするほどの快感に脳裏が真っ白になり、ただ腰だけがビクビクと痙攣する。
口に出された瞬間、驚いたように、少女は目を大きく見開いた。けれども、頭を引くことなく、少し苦しげに眉を顰めたまま、ごくんごくん、と吐き出される精液を飲み下していく。

「う……わ……ごめん、亜季ちゃん、それ、飲まなくてもいいよ……まずくない？」
当然、自分の精液の味など確かめたことはないが、匂いを嗅ぐかぎり、あまり食欲を刺激する香りではないし、そもそも食べ物ではない。けれど、少女は、口の中に放たれた寿治の精をすべて飲み下すと、にっこりと微笑んだ。
「うん……飲んだことない味だけど、でも、大丈夫。だって愛しのトシくんのだもん！」
「ありがとう……」
少女の健気さにじんと感激が胸にこみ上げる。こんなにまでも寿治のことを思ってくれる女の子が他にいるだろうか。
「ふぅ……こんなことしたの、初めてだね……」
照れたように頬を紅くした少女の可愛らしい唇に、飲みこぼした精液がついているのを見つけた。
（なんだか……亜季ちゃんがいつにも増して、可愛く見える……）
今まで感じたことのないほどに、少女がいとおしく、いま絶頂に達したばかりだというのに、亜季が欲しくてたまらない。
「でもちょっとだけ、ちょっと大胆すぎたかな？」
はにかんだまま、亜季が立ち上がると、制服を張り上げている胸が寿治を誘うよう

に、ぶるりと揺れた。制服に包まれた女のシンボルに刺激され、ジンジンと余韻の残る股坐がまたも熱を持ち始める――。
「亜季ちゃん、ごめん、もう一回だけ……」
目の前の亜季に手を伸ばすと、ぐっと強く抱き寄せた。そのまま背後に回り込むと、後ろからスカートをめくりあげる。
「ええっ……あ……んっ……」
「ごめん、本当にごめんっ！　我慢できないんだっ!!」
滾り狂った血流に乗って全身を駆け巡る性衝動が止められない。もはや理性では制止できないほどの情動に突き動かされるまま、めくれあがったプリーツスカートから覗く薄ピンク色のパンティーをずりさげた。
（早く……亜季ちゃんとひとつになりたい!!!）
愛撫する余裕もなく、ただこみ上げてくる切望の赴くまま、亜季のむっちりと張った尻に屹立した肉竿を押し当てるとそのまま押し込む。しかし、したことのない体勢ということも手伝い、なかなか上手く牝穴が探し出せず、左右に弾かれてしまう。
「んっ……謝らなくっていいんだよ……トシくんがしたいことは、何をしたっていいんだからぁ……」

恋人を受け入れやすくするために、少女は上半身を折ると腰をぐっと突き上げた。すると、菫色の肛門と、ぷっくらと盛り上がった陰部がようやく確認できた。
「あれ、亜季ちゃん、もう濡れてる？」
少女の淫裂に手を伸ばすと、とろりとした粘液が指先にまとわりついてきた。
「あ……やだ……トシくんのおちんちんをしゃぶったら……亜季まで興奮しちゃったみたいで……恥ずかしい」
「亜季ちゃんは、おちんちんをしゃぶるだけで、濡らしちゃうようなエッチなコなんだ……」
「やだぁ、そんなこと言っちゃ……だめだよぉ」
いつもぐいぐいと積極的にくる亜季が恥じらう姿が可愛らしく、つい意地悪を言うと、亜季は耳朶まで真っ赤に染めて首を横に振った。
「いいよ、ぼくはエッチな亜季ちゃんが大好きなんだから」
少女の裂け目から滴る愛液を人差し指の腹にこすりつけると、クリトリスを捏ねくる。
「あっ……あぁんっ……トシくんがエッチなコが好きって言うんなら、亜季、もっとエッチなコになるからぁ……」

「いいよ、ほら、もっとエッチになってっ！」
ぐっと細腰を掴み、ますます潤いゆく牝穴に狙いをつけて亀頭を押し当てると、沈み込ませた。ずぶりずぶりと亀頭がめり込んだ先から、痺れるような快感が広がっていく。
（あ……あ……学校だっていうのに……挿入れちゃったよ……）
もしも誰かに見つかれば、不純異性交遊の開き直りなどできない状態だ。しかし、そんな心配など吹き飛ばすほどの快感がそこにあった。
（すごい、亜季ちゃんの中……おちんちんにぴっちり吸い付いてくるみたいだ）
しなやかな膣筋が、寿治の剛直にしっとりと張り付いて心地よく包み込んだ。まるで寿治のペニスに合わせて誂えたようなその感触に加え、膣内の柔らかな粒襞がざわざわと蠢いて陰茎表皮をくすぐるのもたまらない。
「あぁ……挿入っちゃったね……でも、嬉しい」
少女は首だけで振り返ると、切なげにきゅっと目を細めて寿治を見つめた。
恥じらいと喜びが同居したいたいけな少女の表情にいとおしさを覚え、振り返った肩越しに、少女の唇にちゅっとキスをすると、ゆっくりと腰を遣い始める。
「んっ、この体勢、すごく締まる……」

少女の細腰を掴むと、奥までずずっと差し込んだ。立ったまま後ろからというシチュエーションに興奮が煽られるのはもちろんのこと、いざ挿入れてみると、いつもとは違ったみちみちとした締め付けに睾丸がぶるると震える。

「はぁ……んんっ、この体勢、すごく深くまで入っちゃってるみたい……」

亜季も木の幹に手をついて腰を高く突き上げた体勢で目を閉じ、その感触を味わっているようだ。

（はぁ、すごい……熱くて……狭い……）

先端に当たる行き止まりのコリッとした感触は子宮口だろうか。捻り込んだ亀頭でぐにぐにと弄ると、ぐつぐつと熱い愛液が分泌されてマラの張り出しに降り注ぐ。

ただけさえ狭くて窮屈な膣道の、弾力に跳んだ肉壁のクッションが、両脇から陰茎をきゅっきゅっと締めてくる。腰骨にずんずんと響くような快感に睾丸がぎゅうっと持ち上がった。

「うん……もうぼくのちんちん、亜季ちゃんの中にずっぽり入っちゃって……亜季ちゃんの一番奥に当たってるんだ。ほら。これ、わかる？」

「ん……わかる……わかるよ」

牝穴をみっちりと塞がれて、充足のため息を漏らす亜季のバストに後ろから手を回

すと、下から掬い上げて支え持つ。
ただでさえ豊満すぎる少女のバストは、かがんだ体勢にかかる重力により、さらに重みを増して手のひらを押してくる。
「はぁっ……んんっ……あぁぁんっ……」
まるで出来立てのプリンのような乳房の柔肉の感触を手のひらで存分に味わいながら、ぐぐっと腰を抜き差しすると、同級生は耐えきれないとばかりに抑えた吐息を漏らした。
「ダメだよ、亜季ちゃん、声出すと誰かが来ちゃうかも……」
「でも……だって……出ちゃうんだもん……ぁあんっん……んあぁっ……んくっ」
漏れ出る媚声をなんとか抑えようと、少女は左手を口元へと持っていくと、人差し指の側面辺りを口へと咥える。
「あぁあ、亜季ちゃん、今度はいっぱい声出せるところでしてあげるから、今日だけは我慢して」
「んっ……んんっ……我慢する。我慢するから、また亜季とエッチしてね……」
「もちろんだよっ！　ぼく、亜季ちゃんとエッチするの大好きなんだ！」
細腰を押さえて股間を突き上げると、その反動でメロンほどもあるバストがたぷた

ぷと弾んだ。その揺れに誘われてセーラーブラウスの下から手を挿し込むと、ブラジャーをぐっと押し上げて生乳をむんずと摘みあげる。
「はぁんっ……はぁっ……おっぱい触られたら、また声が出ちゃうよぉ……亜季、おっぱい感じちゃうから……」
「でも……亜季ちゃんのおっぱいが大きすぎて……こんなの、男だったら触らずにはいられないよ……」
つきたてのお餅のように、もっちり柔らかなおっぱいの重量を手のひらで楽しみながら、たぷたぷと弛ませ、その中心部でぽってりと尖っている乳輪を指先で捏ねると、亜季の膝がガクガクと震えた。
落ち葉がさくさくと崩れる音とクチュクチュと淫らな水音とが共鳴し、頭の芯がじんじんと痺れていく。
（すごい……亜季ちゃんの身体、すごくエッチだ……）
少女の巨乳でセーラーブラウスとブラジャーはめくれあがり、ゆさゆさと揺れる様はド迫力の一言。もっちりとした尻も十分に成長を遂げていて、制服とのギャップが妙にいやらしい。
（こんなエッチな女の子が……ぼくの彼女だなんて！）

眩暈がするような幸福感に包まれながら、少年の剛直を受け入れて身体を震わせている同級生の双乳を、たづな代わりに掴んで強く腰を打ちつける。
パンパンと淫らな殴打音が響き、接合部から生み出される甘い快感にじんじんと下腹部が震える。
「トシくんってば、大胆すぎる……学校でこんな……」
「最初に誘ってきたのは……亜季ちゃんだよ……」
「違うよぉ、トシくんのおちんちんが悪いんだもん……んんっ」
セーラー服姿で後ろから突かれて、淫らに乱れている少女の首筋には、もう秋も深いというのに、じっとりと汗が浮かんでいる。舌先で舐めとると、甘酸っぱいフェロモンが口の中へと広がった。
（さっき、出したばっかりだっていうのに……またすぐ出ちゃいそうだ……）
挿出をくり返すたびにだんだんと解れてきた膣道の、複雑に折り重なった襞がチロチロを陰茎表皮を快刺激し、陰茎を出し入れする度にまとわりついては、ざわざわと震えるのだからたまらない。
「あぁ、亜季ちゃんの中、本当に気持ちいいよ……」
「んんっ……トシくんのおちんちんも……はぁ……ねぇ、トシくん、亜季、なんかち

ょっとヘン……かも。アソコがジンジンして熱い……ねぇ、ちょっとだけ触ってくれるかな」

「ん、こんな感じ？」

甘えるようにオネダリする少女の股間を、後ろから手を伸ばして弄ると、おびただしい愛液でずぐずぐに濡れていた。太ももまでも垂れ落ちるほどの洪水の中心部を指先で弄ると、中指の腹で擦りあげる。

「……んひゃっ……ん……ど、どうしよう、すっごい気持ちいいみたい……」

亜季にねだられるがまま、くちゅくちゅと指先を動かして花芯を弄ぶと、あっという間に手首までずぶ濡れになってしまった。膣道もいっそうきゅっと収縮して差し込まれた肉竿を締め付ける。

「亜季ちゃん、すっごい濡れてる……ねぇ、ひょっとして、今日はイケるんじゃない？」

「わかんない……わかんないけど……そうなっちゃう……かも……」

少女を絶頂へと導いたことはまだなかった。けれど――。

（今日はイってくれるかも……）

クリトリスを弄りながら腰を突き上げると、亜季は上半身を仰け反らせて背筋を震わせた。

膣道の快感をじっくりと引き出すように、男根をゆっくり抜き差ししながら、淫核を弄っていると、とめどなくラブジュースが溢れてくる。

さっきまではともすれば見失ってしまいそうなほどの大きさだった秘粒が、ぽっちりと張りあがってきたのがわかった。そのままコネコネと擦りあげていると、愛液の粘度が高まり、ねっちょりととろみを増してくる。

「んっ……ひゃぁんっ……んはぁっ……」

もはや亜季は喘ぎ声を殺す余裕もないようだった。必死に木の幹に抱きついて襲い来る快感に必死に耐えている。

そしてその時が来た――。

「あ……あぁっ……だめ、何これ……い、イクっ……」

少女の背筋がピーンと伸びた次の瞬間、膣内がぎゅんと狭窄したのがわかった。続いてペニスを内側へと吸い込むように、膣肉がぐぐぐと蠕動を始める。

「あ……ぁあ……」

びくんびくんと背筋を痙攣させている少女の様子は、初めて目にする痴態だ。少女の可愛らしい唇から、涎の糸がつーっと垂れ落ちて顎を濡らす。

（……ひょ、ひょっとして、亜季ちゃん、イっちゃった！！）

しかし、少女を冷静に観察している余裕は、寿治にもすでになかった。搾り出すような淫穴の動きに、肉棒がわなわなと戦慄き、はじけるような快感に腰が勝手に動きだす。

「あっ、うっ、あぁあっ！」

オルガスムスの快感で蠢く牝内に、我慢できずに腰を思いっきり引いた次の瞬間、叩きつけるように奥まで差し込む。

快感にのた打つ少女の乳房を、がっしりと鷲掴みすると、腰骨が尻にぶつかるパンパンという音も気にせずに、亀頭のクビレがはっきりと露出するほどのストロークでピストンする。鈴口の寸前まで精液が迫り上がった肉竿を、抜いて挿してを繰り返す度に、快感が上増しされていく。

「ぐ……おおっ！」

ひときわ強く腰を打ちつけ、亀頭の先端が子宮口にくちづけた瞬間、興奮が頂点に達した。腰の奥で小爆発が起き、堰を切ったように熱い精液が溢れ出す。

「う……あぁっ……ぐっ……」

慌ててペニスを抜くと、少女のむっちりとした白尻に向けて、どぴゅりと精液を飛ばした。

二度目の射精だというのに、呆れるほどの大量の白濁汁が噴出され、尻ぺただけではなく制服の紺スカートにまで跳ねて、ねっとりと付着する。
「あっ、ごめん……スカート、汚しちゃった……」
「ん……大丈夫……トシくん……」
初めてのアクメを経験した少女は、頬をほんのりと紅く染めて放心した表情で振り返ると、寿治に手を伸ばしてきゅっと抱きついた。
「トシくん……好き……世界で一番……大好きっ」
「ぼくも……だよ」
火照った肌に心地よい秋風が吹き過ぎていく。亜季の背中に手を回すと、強く抱きしめ返した。

「ねぇ、やっぱりニーハイソックスにはリボンをつけたほうがいいんじゃない？」
「そこは各自アレンジで」
「あれー、ストローってどこにあるの？」
「うわぁ、ホットケーキが焦げたぁっ！」
文化祭をいよいよ明日に控え、校内は、どことなくそわそわした雰囲気が充満して

いる。寿治のクラスもまた、放課後になっても、皆居残ったまま、模擬店として出すメイド喫茶の最終仕上げに勤しんでいた。

「じゃあ、ごめん、ぼくは美術部のアーチ作りがあるから……」

まだいくらでも仕事は残っているようだが、美術部の仕事もあるから、クラスに掛かりっきりというわけにもいかない。メニューに載せるカットイラストを書き終え、文化祭実行委員に断りを入れて教室を抜け出そうとしていたところ、背後から肩を叩かれた。

「ご・しゅ・じ・ん・さ・ま！」

「うわっ、どうしたの？　その格好」

振り返ると、ミニ丈のメイド服に身を包んだ亜季がそこに立っていた。

「明日のウエイトレスのコスチューム。ね、ね、ね？　亜季に似合うかな？」

亜季は花道でポーズを決めるモデルのように、その場でくるりと一回転した。下にたっぷりとパニエの仕込まれたミニスカートがひらりと舞って太ももがちらりと覗く。

「うん、とっても可愛いよ！」

黒地のワンピースに白いフリル付きのエプロン、クラスの漫画に詳しいヤツが言うには『絶対領域』と言われているという、太もも丈のニーハイソックスを身につけた

その姿は、その存在感の華やかさも手伝って、『メイド』というよりはアイドルのステージ衣装のようだ。
「なんか熱が籠もってないなぁ。似合わない？」
亜季が頬をぷくっと膨らませて抗議した。
「いや、そんなことないよ、とっても可愛いし、似合ってる」
「えへへ、よかったぁ」
慌てて褒め直すと、すぐにいつもの笑顔へと戻ったので一安心する。
（そっか、メイド喫茶だもんな。女の子たちは、みんなこれを着るんだ。まみちゃんも……似合うだろうな……見てみたいな）
清楚なまみのエプロンドレス姿を思い浮かべながら、ついつい無意識に視線でその姿を探してしまう。しかし、クラス委員を務めるまみの姿は、クラスの中には見当たらなかった。
「どうしたの？　トシくん」
きょろきょろと教室を見回す寿治に、亜季は不思議そうに首を傾げた。
「いや、なんでもないよ……ごめん、ぼく、美術部のアーチ作りの仕上げがあるんだ。帰りは遅くなるだろうから、待ってなくていいからね」

「はぁい、行ってらっしゃーい。じゃあ、明日の文化祭で。ね、自由時間は一緒に回ろうね」
メイド服を着れることがよっぽど嬉しいのか、いつにも増して上機嫌の亜季に見送られて教室を後にすると、美術室へと急いだ。
「遅くなりましたぁっ……あれ、他の部員は？」
しかし、美術室のドアを開けると、そこにいたのは美術部の顧問を務める絵里子だけだった。寿治のほかにふたりいるはずの部員の姿が見えない。
「みんな、クラス展示のほうの準備が忙しいみたいで。抜けられ次第、こっちに顔を出すって、さっき言われたんだけど……期待はできないわね」
絵里子は、手に持っていた画集をぱたんと閉じると立ち上がってアーチに目をやった。
「本当ですか？　うわぁ……」
正門を飾るアーチは、基礎部分は九割方完成しているとはいうものの、風船を膨らませて飾りつけるという仕事がまだ残っている。
「仕方ないわね、わたしも手伝うわ」
さすがに寿治ひとりでは荷が重いと思ったのか、絵里子が手伝いを申し出てくれ、

ひとまずふたりで完成に近づけることになった。

「はい、これで最後の……五十個目」

女教師は最後のひとつの風船を、アーチの一番真ん中に張り付けると、教室の一番前に掛けられた時計に目をやった。時刻は夜の八時をとうに回り、さすがに校内も静まり返っている。

「先生、お疲れさまでした、おかげで助かりました」

これで明日、文化祭が始まる前に門に設置するだけだ。

「やれやれ。結局、一年生は、ふたりとも、間に合わなかったわね。山川くんこそ、お疲れさま、よくひとりで頑張ったわ」

女教師は、肩の凝りを解すように腕をぐるっと回してストレッチすると、その場で大きく伸びをした。

（う……わぁ……）

白いシャツに包まれた胸がぐっと強調されて胸がドキリと鳴った。この胸に触れたことがあるだなんて――。今思い返すと、まるで夢だったかのような出来事だ。

（いや、本当に夢だったのかも……）

白昼夢を見たのかもしれない。その証拠に、絵里子は今日だって、まるで何もなかったかのように振る舞っているのはないか。

（でも……確かに、あのおっぱいを揉んだし、あのお尻に触ったし、アソコにだって……）

柔らかで、むっちりとして、温かだった。絵里子の身体の感触を反芻していると、アソコがじゅんと熱くなってきた。

（うわっ……どうしよう……）

慌てて諌めようとしてふと思いつく。もしも、寿治が欲情していることに気がついたら、前と同じように、寿治の欲情を受け止めてくれるのではないか。

（先生ともう一度、してみたい……）

前にした時は余裕がなさすぎた。けれども、ほんの少しだけ上がった経験値でもって、絵里子の熟した肉体を味わってみたいという欲望がむくむくとこみ上げてくる。

（けど……さすがに自分から勃ってしまったと自己申告するのは恥ずかしいし……）

どうしたら、先生とできるのか。

上手い誘い方がわからずに、もじもじとしている寿治に絵里子がふと目を留めた。

「君、どうしたの、黙りこくっちゃって」

「いや……あの……」
なんと言えばいいのかわからずにしどろもどろに答えると、女教師はふと気がついたように悪戯っぽい笑みを浮かべて、寿治の顔を覗き込んで言った。
「ねぇ、君、ひょっとして、前みたいなことしてくれないかなって、期待してるでしょう？」
「あっ……うっ……は、はい……」
さすがは大人の女性の洞察力だ。ずばり図星をつかれ、かーっと顔が熱くなる。
（うぅーっ、考えてたこと、バレちゃったよ）
やましい願望がバレてしまった恥ずかしさで女教師の顔を直視できず、思わず下を向いた寿治の頬を両手で包み込むと、絵里子が目線を合わせて優しく微笑んだ。
「残念だけど、ダメ」
「やっぱり……そうですよね」
塩をかけられた菜っ葉のようにしゅんとする寿治に、女教師は優しく微笑んで言った。
「あれは特別だったの……」
「特別……ですか？」

どういうことだろう。首を傾げる寿治に、女教師が続ける。
「そうよ。君が転校したてで不安そうだったのと……寂しそうだったから。でも、今の君は、もう寂しくないでしょ？」
「寂しいですよ。家に帰っても誰もいないし……」
「でも、君には可愛い彼女がいるじゃない」
「えっ!?」
「亜季さんと付き合ってるんでしょう？　先生のところまで噂が届いてるぞ」
「あ……はい……そうなんですが……」
まさか担任教師にまで、亜季との噂が届いているとは思わなかった。
（うわぁ、それなのに、ぼく、先生とまたエッチしたい素振りなんて見せちゃって……最低だ……）
居たたまれなさに穴があったら入りたい気持ちというのは、まさにこんな気分のことだろう。
「ううっ、先生、すみません、ぼく……」
「いいのよ、仕方ないわ。男の子なんだもん、いろんな女のコに興味がある時期よね」
すっかりしゅんと項垂れた寿治を見て、女教師はくすりと笑うと、ぽんぽん、と元

気づけるように寿治の肩を叩く。
「まぁ、君は可愛いから、すぐに彼女ができるんじゃないかって思ってたけど。でも、正直、その相手が亜季さんっていうのは意外だったな」
「えっ!? な、なんですか?」
「てっきり君はまみさんのことが好きなのかと思ってた。そうでしょう?」
「あ……なんで……わかるんですか?」
「君の態度を見ていればすぐにわかるわよ。ほら、一度注意したでしょう。バレー部の部活に気を取られすぎだって。君に注意した時は、体操服の女のコたちを見てるのかなって思ってたの。でも、その後、すぐにわかったわ。君はまみさんのことを見つめてたんだって」
「あの……先生、ぼく、よくわからないんです……」
誰にも言えずに心の中に仕舞いこんでいた気持ちを、本当はずっと誰かに話したくて仕方がなかった。誰に話せばいいのかわからないでいた悩みを、絵里子ならば優しく耳を傾け、アドバイスしてくれるのではないか。
「あの……先生……ぼくの話、聞いてくれますか?」
「しょうがないわね、話してごらん? ほら、そこに座って」

今にも泣きだしそうな寿治に優しい視線を向けると、女教師はゆっくりと椅子に腰を下ろした。

「なるほどね、やっぱり君は、本当はまみさんのことが好きなのね。でも、亜季さんのことも嫌いじゃない、と」

「はい……」

すっかり胸の内を吐き出すと、さっきまでの途方に暮れていた思いが、幾分か晴れて、さっぱりとした気持ちになった。

（先生に、聞いてもらえてよかったな……）

今までひとりで抱えていた重い荷物が軽くなったわけではないが、ただ寿治が重い荷物を抱えている、ということを誰かが知っていてくれるというだけで、こんなに気の持ちようが変わるなんて知らなかった。

それでも、まだどうすればいいのかの答えを見つけることはできないでいるウブな男子生徒を勇気づけるように、年上の女教師は寿治の手を取ってぎゅっと握り締めた。

「あのね、そんなの、簡単なこと。君は君の好きなようになさい」

「えっ……でも……好きなようにって、そんな勝手なことしたら、亜季ちゃんを傷つ

けちゃうし……それにまみちゃんに振られたら、ぼくも傷つくし……」
確かに女教師の言う通りだとはわかっている。けれど、それができないから、困っているのだ。しかし、女教師はきっぱりと首を横に振った。
「恋なんて必ず誰かが傷つくものよ。それは亜季さんかもしれないし、まみさんかもしれないし、君かもしれないし、その全員かもしれない。けど、誰かを傷つけても、自分がいくら傷ついても、それでも手に入れたいと思うものが本物の恋なの。もちろん、今すぐに、っていうのは無理かもしれないわ。でも、ゆっくりと考えて御覧なさい。時間はまだまだあるんだから。それで、傷つく覚悟、傷つける覚悟ができたら、自分に正直に、好きなようにするの」
女教師の言葉は力強く心に響いてきた。
傷つけても手に入れたい相手――。少しだけ道が見えた気がした。
今すぐには無理だけれど、それでも、いつかはきっと、まみに告白をする覚悟ができる時が来る。それは亜季との別れを決意した時だ。
(ぼくに……女のコを振ったり、女のコに告白したりする勇気があるのかな)
やはり無理な気がする。でも……堂々巡りで黙り込んだ寿治の頬に、絵里子はすっと手を当てると、顔を近づけた。そのまま一瞬だけ唇を寄せると、すぐに離れる。

「もうっ、そんな顔して、母性本能くすぐるから、可愛くって、ついキスしちゃったじゃない」
「先生……」
唇に残った淡い感触に、泣きたいような、それでいて励まされたような温かな気持ちが胸いっぱいに広がる。
「ほら、元気を出して。ね、いつか、もしも……もしもよ。何か原因があって、君が亜季さんと、喧嘩をしたり、別れることがあって。それで、まみさんとも上手くいかなかったら、先生が、また、君のこと、慰めてあげるから」
「えっ、本当ですか⁉」
「うん、本当。だから、笑って。ね？」
女教師は、寿治の顔を覗き込むとにっこりと微笑んだ。その優しげな笑みに緊張がゆるゆると解ける。
「先生、ありがとうございます」
「いいのよ。あぁ、もうこんな時間。そろそろ帰りましょう、明日は文化祭なんだから、しっかり寝て充電しなくっちゃね」
女教師は少し照れくさそうな笑いを浮かべたまま、さっと立ち上がった。後に続い

て廊下へと出る。
「じゃあ、明日ね。7時半に美術室。遅れないこと」
「はいっ、さようなら……先生、本当にありがとうございますっ」
去っていく絵里子の後ろ姿に向かって叫ぶと、絵里子は後ろを向いたまま、手を高くあげて応えてくれた。
(先生に話せてよかったな……)
何も解決はしていないが、気持ちが軽くなったことは確かだ。少し弾んだ足取りで鞄を取りに教室へと向かう。
さすがに夜の八時を過ぎて、明日の文化祭本番に向けて居残り作業をしていた生徒たちも、皆、帰宅した後のようだった。教室はもちろんのこと、廊下の電気もすっかり消された夜の校舎は、少しだけ薄気味悪い。
(あれ……?)
薄暗い廊下の先、寿治の教室にうっすらと灯りが点っているのが見えた。
(誰かまだ残ってるのかな……)
内側から人の話し声などは特に聞こえない。となると、最後の人が消し忘れてしまったのだろうか。

少し緊張しながら、教室の扉を開けると、机に向かい作業していた黒髪の少女が驚いたように振り返った。
「山川くん!?」
「あれ、どうしたの、景井さん、こんな遅くまでひとりで……」
少女の前の机には何かパネルのようなものがあった。右手にはマジックインキが握られている。どうやらひとり居残って、まだ明日の準備をしているようだった。
「急遽、文化祭実行委員の本部にかけるパネルを作ることになって……山川くんこそ、ずいぶん遅いね」
「うん、美術部でアーチ作りがあって、今まで作ってたんだ」
「そっか、遅くまでお疲れさま」
まみとふたりきりでこんなふうに話すのは、久しぶりのことだ。なんとなく気まずくてギクシャクしてしまいながらも、やはり嬉しくて仕方がない。
机の中の荷物を鞄の中に仕舞いながら、まみのほうを窺うと、パネル作りにずいぶんと難航しているように見えた。
(どうしよう、手伝ってあげたほうがいいのかな……)
「大丈夫？　手伝おうか」

少し悩んだあげく、思いきって声をかけると、まみが顔をあげた。
「え？　本当に？」
「うん、ほら、ぼく、美術部だから、そういうの結構得意だし」
パネルを見ると、クラスの出し物の紹介が書かれていた。
字はさすがに優等生のまみらしく綺麗だが、しかし、パネルとして展示されるには、ちんまりとまとまりすぎていて、遠くから見た時にまるでインパクトがない。
「……助かるかも。本当に、こういうの苦手で」
まみが恥ずかしそうに肩をすくめて言った。いつもは完璧な優等生の困った顔は妙に可愛くて、胸がどきんと騒いでしまう。
「いいよ、じゃあ、ぼくがやるよ。これ、色とか使ってもいいんだよね」
「うん、パネルの大きさは決まってるけど、中身は自由」
「じゃあ、十二色マーカーがあるから、もっと目立つようにしようか」
机の横に掛けた美術用品をまとめた袋の中から、緑色のマーカーを取り出すと、パネルの文字を強調するようになぞる。
「ありがとう、本当に助かる」
まみが身体を寄せてパネルを覗き込んだ。

「いや、ぼく、これくらいしか取り得がないからさ」
パネル制作について、ああだこうだと意見を交換しあううちに、さっきまでの気まずさはなくなり、パネルが完成に近づく頃には、すっかりと打ち解けていた。
（思いきって、手伝いを申し出て、よかったな……）
久しぶりに過ごすまみとの甘やかな時間を楽しんでいると、まみがためらうように言い淀みながら、寿治を上目遣いで見上げて言った。
「あの……あの……ね。山川くん」
「ん、どうかした？」
振り返ると、まみと視線が絡み合った。その頬はほんのりと紅く、迷いを示すように唇に白い歯がきゅっと食い込んでいる。
「あの……あの日のこと。急なことでビックリしちゃって……でも……」
「え？　あ……」
まさかまみから、あの日のことを持ち出されるとは思っていなかった。ひやりと背筋が冷たくなって、心臓がバクバクと跳ねる。
「……ううん、やっぱ……いいや」
しかし、まみは、おずおずと寿治の顔を見た後、小さく首を横に振って黙りこくっ

てしまった。
「ど、どうしたの、景井さん。でもって……」
「ううん、なんでもないんだ。ごめんね」
続きが聞きたい。けれど、まみは首を小さく横に振ると、無理につくったような笑顔を浮かべた。
（なんだろう、何を言いかけてやめたんだろう）
しかし、まみは唇をきっと結んで、これ以上、何も話してくれそうにない。
（気になる……なぁ）
軽蔑した、とか、嫌いになった、とかそういうことだろうか。
しかし、それにしては、寿治に相談しながらパネルの文字を色ペンで縁取るまみの様子は楽しそうだし、時折肩が触れるのも気にしている様子もない。
（ぼくのことが大嫌だったら、こうしてふたりきりになったりしてくれないよな……）
まだ寿治には傷つく準備はできていない。だから、発言の先を問い質す勇気もない。けれど――。
（でも……ずっと話してさえくれなかった景井さんと、仲直りできてよかった……）
心が浮き立つのは、文化祭前日の夜だからじゃない。まみとの距離が以前みたいに

戻ったおかげだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

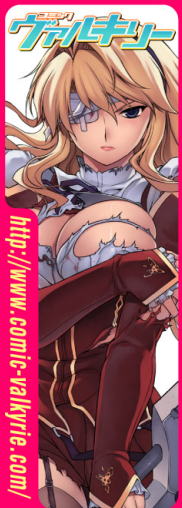
※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁でではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!